

『失われた時を求めて』における「ゴモラのほう」——(II)

徳田陽彦

第二章 「アルベルチーナ表現法」

アルベルチーナは物語で「最も重要な役割を演じ、物語のやまを持つてくる人物」(「プルースト」)⁽¹⁾だが、近づけば近づくほど、われわれの抱くアルベルチーナ像は明瞭になるどころかますます曖昧になってくる。これは、登場人物としてのアルベルチーナが第一巻刊行時のプルーストの構想にはなく、物語に遅れてやって来たこと、さらにプルーストが一九二二年に死んだために『囚われの女』以降の巻が著者の最終的な推敲をへないで刊行されたという事実に起因する、アルベルチーナ表現の不整合性によるだけでなく、描出されたアルベルチーナ、肉体をもったアルベルチーナその人が、「たった一人のアルベルチーナの中に多くのアルベルチーナ」(III、七二)⁽²⁾がいると〈私〉に語らせるほど、多様な姿のもとに表現されているからにはかならない。またアルベルチーナの小説上の具体的な役割・機能は、同性愛の女だという疑惑を主人公の〈私〉の裡に生じさ

せ、彼女の存在がもたらす周囲との関係が〈私〉の嫉妬の源泉になるということである。しかしそのように創出された小説の中間部の女主人公アルベルチーナについて、われわれは確固たる認識を呈示できるのであろうか。彼女の性格は？ 生活は？ 境遇は？ 彼女の同性愛は真実なのか？ いや、われわればかりではない。アルベルチーナの死後、話者の〈私〉はおのれにこう問うのだ、「本当のところ彼女は何者だったのか？」と(III、五一六)。

それほどアルベルチーナ表現の全体性を把握するのは困難なのだ。表現の全体性をめざさなくとも、物語の表現要素のひとつ、彼女の性格でさえ、それを統一することは至難の業と言わねばなるまい。アルベルチーナが、「すぐれて矛盾した存在」⁽³⁾であり、「はつきりとした性格が欠如」⁽⁴⁾しているからである。「他の諸人物にたいしてはそれぞれの性格を描きながら、愛する女にはどんな性格をあたえることもさしひかえ、……あの性格の諸特徴よりもっと本質的な対象をめざすのである」(I、八九五)、と話者は主張している。この主張にわれわれも共鳴してもよい。ところで小説を読むとは、

『失われた時を求めて』における「ゴモラのほう」 (II) (徳田陽彦)

「性格の諸特徴」にひとつひとつ当たってからようやくその本質を能動的に完成する作業であるはずだ。しかしアルベルチーヌの場合はこの「性格の諸特徴」そのものが、あたかもわれわれの射程範囲内に存在しないかのように、読み手の理解を超える、いやまったく逆に理解の手前に留まっているのだ。それは「矛盾に充ちた性格」といった類いのものではない。そうであれば、矛盾しているということそれ自体が一定の評価を伴った性格になり得るのだから。アルベルチーヌの性格に関しては、ホルのつぎのような評価が正鵠を射たものとわれわれには思われる。「ひとりの登場人物——悲劇的な運命をもった登場人物——としての生をになうとしても、彼女の性格を想像するのにおぼえは困難をおぼえる。そもそも彼女には性格などないのかもしれない」⁽⁵⁾。

話者の〈私〉が伝える、〈私〉から見たアルベルチーヌ像は、量的にも質的にも複雑多岐にわたる。アルベルチーヌの行動・行為に対する〈私〉の反撥と警戒、彼女の同性愛から生じる嫉妬、そしてそれらの分析はじつに夥しいものであるが、そうした膨大な量の情報を通して、われわれには彼女の実像を完璧に把握することはできない。なぜならひとたび〈私〉の意識のフィルターで濾過したアルベルチーヌ像や彼女の言葉は、「注釈の一部と化し、その結果、この少女が何を考えているのか判らなくなり、ついには話者の考察しか存在しなくなる」⁽⁶⁾からだ。

なるほど、話者の〈私〉は、夥しいイメージを駆使してアルベルチーヌを描く。〈私〉がバルベックで出会ったアルベルチーヌは、そのときはとりわけ、海を背景に海の泡から生まれた海のシンボル

として演出される。しかしその海は、「アルベルチーヌに似て、けっして同一というのではなく、ブルーストのヴィジョンに依拠した愛する存在のシンボルとなるが、統一性もなく実体もない幻影であり、継起する促えどころのないイメージ」⁽⁷⁾である。変幻自在なアルベルチーヌ。しかしそれならば、われわれには各瞬間ごとに生成する彼女のイメージを把握するという方法が残されている。すくなくとも瞬間ごとのイメージは確実に把握できるであろう。だが果たして、われわれはこの方法で——瞬時に把握したイメージの累積で——、彼女の実像を把握できるのであるか。〈私〉のようにそのつど変貌するアルベルチーヌ像に心を奪われ、確信と疑惑のあの終わりのないサイクルに巻き込まれないであろうか。〈私〉にとつてのアルベルチーヌの唯一の存在様式は、「数多くの部分、数多くのアルベルチーヌに分かれたこのアルベルチーヌの部分」(Ⅲ、五二九)であることに鑑みれば、彼女の分割された各部分を統一し得る実像へと収斂させる企ては無謀であり、不可能であると認識せねばならないことが理解されよう。

このように考えるとき、「彼女は私の創作だ」(Ⅲ、二一九)と語る話者の〈私〉の言葉は、アルベルチーヌの全体性の有無を問ひ、その性格も実像も明確に定義できないひとりの主要登場人物の実体の有無を問ひ続けるわれわれに方向転換を促さざるを得ない。われわれのいままでのアルベルチーヌ理解は、話者の〈私〉に倣った同じような話法にあまりにも依拠しすぎていたのではないか、という反省を促す。われわれはいったん〈私〉の話法の呪縛をのがれて、アルベルチーヌという〈現象〉にアプローチすべきではないのか。

アルベルチーナの客観的な認識は不可能だという話者の締念にみちた固定観念から、いったん離脱する必要性があるだろう。従って第二章とそれ以後のわれわれの課題は、物語のなかで表現されているアルベルチーナを話者の〈私〉の解釈から切り離し、まずその客観的境遇を抽出することからはじめて、彼女の本質とされている同性愛を物語に表現された範囲内でかつわれわれの視点で再構成し、ついで彼女の同性愛表現そのものを考察することである。

ブルーストはバルザックのように、登場人物をその誕生から死まで系統だつて描くことはない。とりわけ主人公の〈私〉とアルベルチーナの境遇については、それを読者に知らせることを目的として、まとまった単位で地の文のなかで展開することは少ない。アルベルチーナや第三者の会話のなかではつきり知らせるためという意図もなく触れられていたり、あるいは単なる付随的なエピソードの形で地の文に挿入されることが多いので、読者はうっかり見過してしまふくらいだ。小説力学の価値という点から考えると、アルベルチーナの実際的な境遇はそれほど重要ではないかもしれない。事実、ブルーストは前章で触れたように、グラッセ版のなかの既存のボンタン夫人の言葉「私の娘」を、現行版では「私の姪アルベルチーナ」という具合にいても簡単に修正してしまったほどである（その理由に関するわれわれの考えは前章の同じ箇所で述べた）。またブルースト自身、アルベルチーナの境遇について、「彼女がボンタン夫人と親戚であるということも、すばらしく拡大するあの仮定の領域に、すでに制約を設けることになっていた。仮定がのびてゆく通路の一つをそれによってふさぐことになっていた。この少女に近づいてゆ

くにつれ、また彼女についてだんだんよく知ってゆくにつれ、そんな知識はマイナスのはたらしをするようになっていった。それは想像力や欲望の占めていたそれぞれの部分が、価値のひどく低下した概念に置きかえられるから」（Ⅰ、八七三）と〈私〉に語らせ、アルベルチーナの出自、境遇に関する情報は、彼女と〈私〉の物語の展開や〈私〉の想像力のためには、なければならないほど有効であると示唆している。しかしブルーストの表現するアルベルチーナと〈私〉の関係を考察すると、ちよつとしたアルベルチーナの洩らした彼女の境遇に関するエピソードが、主人公の〈私〉の彼女に対する態度・感情を激変させ（たとえば、ヴァントウイユ嬢の女ともだちがアルベルチーナの母がわり姉がわりとなって彼女を育てたトリエステで、彼女は生涯最良の年を過したというエピソード——Ⅱ、一一一四）、物語のその後の経緯を大きく変貌させる場合もあることが理解される。いやこのエピソードこそ、逆説的に〈私〉の想像力を刺戟し、想像力を濫用させ、アルベルチーナに対する同性愛の疑惑を私の裡に募らせるのだ。だからわれわれは改めてここで、物語の文字の間に散在するアルベルチーナの客観的な境遇に焦点を合わせ、それに関する叙述を再点検してみたい。アルベルチーナ個人の出自、個人の情況、ボンタン家との関係、出身階級、生活・暮しぶり、その過した土地という視点から、話者により与えられた情報の範囲内でアルベルチーナの境遇を再構成してみたい。

〈アルベルチーナ固有の出自〉

（以下の引用文のなかの傍点は筆者によるもの）

『失われた時を求めて』における「ゴモラのほう」(II) (徳田陽彦)

(I、八〇〇—I) バルベックで、〈私〉はある婦人がアルベルチーヌの友だちのことをつぎのように言うのを耳にする、「あれはシモネの娘さんのお友達よ」。この言い方はシモネ家の人々がアルベルチーヌ以外にいることを前提としているが、実際にはシモネ家の人々は彼女しか登場しない。婦人の口調には「得意そうな知ったかぶり」があり、話相手の顔には、「『シモネの娘さんのお友達』というめぐまれた人間をもっとよく見たいという好奇心があらわれ」と話者は語る。このことはシモネ家がバルベックでよく知られているかなりの家柄であることを意味しよう。しかしのちの展開で(II、三五六)、アルベルチーヌが用いた《Selection》という言葉には「たとえそれがゴルフ場に適用されているにせよ、シモネ家にぴったりのものではない」という注釈が付されていて、家柄は高くないことが窺える。ではいったいシモネ家はどういう家柄だったのか。

(I、八〇七) バルベックのグランド・ホテルの「外来訪問者名簿の第一ページに、『シモネと家族』という文字を認めたとき、私は心に軽いショックを受けずにはいられなかった」。しかし家族は物語のなかにはまったく現われない。アルベルチーヌがボンタンの姪としてバルベックに滞在している以上(またボンタン家に養われている以上)、本来は「ボンタンとアルベルチーヌ・シモネ」と書かなければならなかったはずである。いったいこの「家族」はどこへ行つたのか。同じような意味の挿話(II、三六九)——「アルベルチーヌは『自分の家族……』について、バルベックではその一端にふれることさえ拒否していた内緒話を、私に語ってきかせた」。

「自分の家族」とはボンタン家のことかシモネ家のことか、われわれには定かではない。この記述の前ではnが一つのシモネ家のことを〈私〉が論じているからには、ここはシモネ家と解すべきであろう。しかしシモネ家の構成員に関して、〈私〉は物語のなかではないところに触れていない。またアルベルチーヌは叔父を話題にしながら、「残りの私の家族」(I、八八三)という言い方をしているが、この場合の「家族」とは前後の脈絡からしてボンタン家の人々のことを指しているであろう。彼女にとって「家族」とは何であるのか。

(I、八九五) アルベルチーヌは「貧しくて孤児」と表現されている。前述の「シモネの娘さん」を知る特権ならびに「シモネと家族」という記載は「孤児」といささか矛盾してはいまいか。孤児の記述は、『囚われの女』(III、四八)のなかにもみられる、「彼女には父・親も母・親もなく、この上なく自由な生活を送っていた」。

〈アルベルチーヌの個人の生活情況、年令、住居等〉

(I、八八三) バルベックでのアルベルチーヌの言葉、「叔母は叔母よ。でも叔母だからといって、私があの人を愛しているわけじゃないわ! 叔母はね、これまでになつた一つの望みしかなかったの。私を厄介払いすることなのよ。本当に私の母がわりになつてくれた人、しかもその人と私となんの関係もないんだから二重の意味でお世話になつただけでも、それはね、或る女友だちなのよ。もっとも私の方でもその人を母親のように愛しているのだけれども。今度あなたに写真をお見せするわね」。この箇所では〈私〉は彼女の話をとくに気に留めることなく、すぐに別のエピソードに移行し

た。しかしこれは、〈私〉が「ひらけ胡麻」(II、一一二七)と形容している、二回目のバルベック滞在中の軽便鉄道の車中におけるアルベルチーヌの言葉の重要な布石となっていることに注目しなければならぬ。すなわち「或る女友だち」とは「サフィスム」のプロフェッショナルであるヴァントウイユ嬢の女ともだちであることが判明するのだ。(II、一一一四)「いつか、私の母がわりに、姉がわりになつてくれた、私より年上の女のお友だちのことをお話したわね、おぼえていらっしやるでしょう、そのひとつ、私はトリエステで、生涯の最良の年を過ごしたのよ、……このお友だちなの(あら! あなたが想像するかもしれないそんな種類の女のひとでは全然ないわ!)ほらこれをごらんさい、ずいぶん変わっているでしょう、このかたがちやうどそのヴァントウイユのお嬢さんの一番仲のよいお友だちなの、だから私はヴァントウイユのお嬢さんほとんどおなじくらいよく知っているわ。私はいつも、私の二人のお姉さま、と呼ぶの」。この場面で、アルベルチーヌは以前バルベックで〈私〉に見せようとしたヴァントウイユ嬢の女ともだちの写真を見せる。また「花咲く乙女」の文章とこの『ソドムとゴモラ』のそれもきわめて酷似したものだ(「私の母がわりになった」*comme ma servante* という表現を繰り返す)。ところで「生涯最良の年」*mes meilleures années*と複数で表現されていることを考慮して、アルベルチーヌの言葉から、彼女は「女友だち」にトリエステで「母がわりに」数年間育てられた事実を抽出すべきであらう。

(I、九五〇) 「アルベルチーヌが真先に、突然去っていった

が、べつに仕事 *travail* を控えているわけでもなければ、おもしろいあてがあるわけでもないのに、なぜそんなふうに急にパリに帰ったのか」。この *travail* は「勉強」ではなくすべき「仕事」と解した方がよいだろう。この記述と前述の(彼女は)「この上なく自由な生活を送っていた」という記述を融合させると、「パリでのアルベルチーヌの生活は、なすべき仕事もなく、この上なく自由なもの」というように把握できよう。

(II、三五五) 『ゲルマント』のなかで、アルベルチーヌがパリの〈私〉の家を訪問する条り。話者はバルベックに滞在していた頃の彼女の礼儀正しい言葉遣いの例として「おそれいます」を紹介し、そのときのボンタンの反応についてこう述べている、「この子もまもなく十四歳だからね」。ジュネットの物語の外的時間の経過に関する仮説^⑧(プリーストは物語の年代を一切明示していないから)に依拠すれば、最初のバルベック滞在が一八九七年の夏、アルベルチーヌがパリの〈私〉の家をはじめて訪問するこの条りは一八九九年の秋になる。逆算すると、アルベルチーヌは一八八三年の夏ないし初秋に生まれたことになる。また彼女が〈私〉の家で「四われの女」として同棲していた時期は一九〇〇年の秋から一九〇二年の初頭まで、すなわち、彼女が十七歳から十九歳までの間である。すると、『逃げ去る女』の「アルベルチーヌは成人だから」(III、四四六―加筆)という〈私〉の言葉との齟齬はどう解釈したらよいであろうか。アルベルチーヌがパリの〈私〉の家を最初に訪問するのは、一八九九年の秋と推測できる。アルベルチーヌは不意に前触れもなく訪問し〈私〉を驚かす。部屋に入ってきたアルベルチーヌ

は「ふつくとふとり、その肉体の豊満さのなかには、私がまだあれから一回も行っていないバルベックでの過ぎ去った日々がそのままはいつて」(II、三五〇—一)いたし、「彼女はべつの顔をもっていた、というよりも、彼女はついに一つの顔をもつにいたったのだ。そのからだも大きくなっていた」(III、三五一)と「私」は描述する。十四歳だった少女は二年後の秋にこれほど変貌したのだ。「私がまだあれから一回も行っていないあのバルベック」という言葉はある程度の時間の経過を示唆しているし、また「アルベルチーヌは、こんどは、いつもより早くパリにひきあげてきたのだ。通常彼女は春にしかパリにやってこなかった」(III、三五一)と「例年の予定に反して、この年は田舎暮らしをせずに、彼女は直接バルベックからやってきたのであり、さらにそのバルベックにも、いつもほどおそくまで滞在していなかったのだ。彼女に会ったのは久しぶりだった」(III、三五二)を考え合わせると、「バルベック」と「アルベルチーヌの訪問」との間には、やはり二年の時が経過しているとみなしてさしつかえないであろう。それゆえ、アルベルチーヌと「私」が同棲していた時期は一九〇〇年の秋から一九〇二年の初頭まで、すなわち彼女が十七歳から十九歳半ばまでである。先の「成人」の表現はどう解釈したらよいだろうか。フランスの民法で成人は一九七四年からは十八歳、それ以前は二十一歳であった。十七歳から十九歳まで「私」の「囚われの女」であったアルベルチーヌは未成年であり、場合によっては、「私」の言うような誘拐罪ではなく刑法三五四条の「未成年者の略取」に関する刑に「私」は問われる可能性もある。もちろん彼女が二十一歳以上であれば違法な行為とはみ

なされない。『囚われの女』の「成人」の記述は、A・ウィンストン¹⁰⁰によれば加筆であることから、加筆する際、ブルーストはいささか混乱をきたしたのであるうか。なおアルベルチーヌの年令推定とは別に、以上述べてきたことから彼女の生活習慣も読みとれる。つまり彼女は「毎年夏にバルベックにおそくまで滞在し、そのあと田舎に行つて翌年の春まで過ごし、それからパリに帰つて来る」。

(II、三七〇) アルベルチーヌの住居に関する叙述は二、三しかない。このページの彼女の話のなかの「もうすぐに叔母さまの入口から独立した入口が私にできるから」という言葉は、彼女はパリでは叔母ボンタン夫人の家に住んでいることを表わしている。またバルベックで彼女は、「叔母ボンタン夫人の別荘があるこの小さな浜辺(エプルヴィル筆者)と、彼女の『寄宿させられた』ロズモンド一家の別荘があるアンカルヴィルとのあいだを、彼女の言葉によると「かけもち」していた」(II、七八〇—一)。彼女はバルベックではエプルヴィルの叔母の別荘とアンカルヴィルのロズモンドの一家の別荘に半分づつ住んでいた。「囚われの女」のなかで、「私」は「彼女は以前に、一年の半分を他人の家で暮らす習慣があった」と述べているが、「他人の家」とは、叔母の家以外のことを指すのであろう。バルベックのロズモンドの一家の別荘や「田舎」で暮す場合もボンタン家ではない「他人の家」に住むこともあるのかもしれない。

(III、六一四) 『逃げ去る女』のアンドレの告白のなかで、アンドレはアルベルチーヌが婚約していたことを「私」に明らかにする。婚約相手はヴェルデュラン夫人の甥のオクターヴである。だか

ら、「私がなにも告げずにヴェルデュラン家の夜会に行ったので（アルベルチーヌが筆者）腹を立てたとき、二人（ヴェルデュラン夫人と彼女筆者）のあいだで仕組まれていた陰謀は、アルベルチーヌにヴァントウイユ嬢を会わせるのではなく、彼女を愛していた夫人の甥を会わせるのが目的なのだった」ことがのちに判明する。

（Ⅲ、六一九） 同じくアンドレの告白のなかで、アルベルチーヌが陽チフスにかかったという事実が暴露される。「特に陽チフスにかかってから（あなたがあたしたちみんなと知り合う一年前のことよ）、あの人、本当に頭がどうかなくなっちゃったんだわ」。

＜ボンタン家との関係＞

最初にアルベルチーヌの名が出現するのは学友のジルベルトの口からである。「有名な『アルベルチーヌ』……、あのひとは大きくなったらとても『みだら』な女になることよ」（Ⅰ、五一二）。またボンタン夫人の口からは「姪のアルベルチーヌが、私とおなじですの。ずうずうしいったらありませんのよ、その子が。……食えない子ね、お猿さんのようにこぎかしんですよ」（Ⅰ、五九八）と評される。アルベルチーヌとボンタン夫人の親戚関係は、「私の叔母の夫がお役所にいるんだらうって？」（Ⅰ、八八三）という彼女の言葉から、またアルベルチーヌの死後、＜私＞の裡ではだんだん忘却の彼方に消え去ろうとしていた頃、＜私＞が彼女のことを思い出そうとすると「色香の褪せた顔には早くもボンタン夫人の横顔が種子のようにのぞいていた」（Ⅲ、六四三）という描写から察すると、彼女と血のつながりがあるのは妻のボンタン夫人である。

ボンタン家は、「偏狭な思想をもち、反動的で、教権を重んじる

『失われた時を求めて』における「ゴモラのほう」（Ⅱ）（徳田陽彦）

ブルジョワなるものの、典型とっていいボンタン・シユニユ家の流れをくんで」（Ⅰ、五一二）おり、一度破産したが、一家は家運を盛りかえした。叔父のボンタンは建設省の官房長である。（ただし、別の箇所では郵政省の官房長になっている。Ⅰ、四六六、六四三）。ときには郵政省、ときには建設省の役人だったボンタンは、オーストリアで大使館の参事官にもなっていた（Ⅱ、一一九）加筆）。ボンタンの役職に関して、ブルーストは統一せずに、アルベルチーヌの物語の展開につれて、そのつど物語の内容と整合するように辻褄を合わせたと考えられよう。ボンタン夫人は「社交季節の半分はパリにいなかった、その夫が相も変わらずお役所にあきてやたらとあちこちの『ポスト』をひきうける」（Ⅱ、七三五）からである。またボンタン家の暮しぶりは、「ボンタン夫人の家庭も雑役女中を一人使っているにすぎないといった程度」（Ⅱ、七九一）であることから判断すると、それほど裕福であるとは思われない。このボンタン夫人は前述のように（Ⅱ、七八一）、バルベックに別荘をもち、トゥレーヌに家があり（Ⅲ、三五八、四三二）、アルベルチーヌは＜私＞の家を出て、そこに身を寄せることになる。＜私＞がサン・ルーに彼女を連れ戻すように依頼する際、「シャテルロー」（Ⅲ、四三六）で下車するように指示していることから判断すると、ボンタン夫人はトゥレーヌ地方のシャテルロー（附近）に家を持ち、アルベルチーヌはそこで落馬して死ぬ（『逃げ去る女』Ⅲ、五二三）ページのエメをボンタン夫人のニースの別荘へ調査にやる条りの「ニース」は、ブルーストがまだ地名を修正していない証拠）。

＜ボンタン家のアルベルチーヌに対する考え、扱い方＞

『失われた時を求めて』における「ゴモラのほう」(II) (徳田陽彦)

ボンタン夫人のアルベルチーナに対する態度は、「これまでにたった一つの望みしかなかったの。私を厄介払いすること」(I、八八三)に集約される。アルベルチーナが他人の家で一年の半分の暮すわけは、「その叔母がほとんどかまわってやらない」(I、九三五)からであり、「彼女を厄介払いしたがっているいかかわしい評判のボンタン氏の世話になり、よくない生活をしていながら、あちこちの家の夕食に招かれたり、そればかりか、滞在まですすめられる結果にもなった」(I、九三五)からである。そして「私」が彼女と自分の家で同棲していても、ボンタン夫人は心配するどころか、「今は金持と結婚させて姪を厄介払いできるなら、そして自分に多少の金がかかりこむなら、見て見ぬふりをしようという腹だった」(III、四八)し、「アルベルチーナが私と結婚して自分に財産をもたらず日がくるまで、彼女に一文もかからなければよいと思っている」(III、一九三)のだ。一方アルベルチーナは叔母の世話になっている以上、叔母を喜ばせたいと思っていたし、生まれつき人に快感をあたえるのが好きだった彼女は、叔母にあまりおもしろくない午後の会にひっぱってゆかれても、「そこへ行くことによって、叔母をよろこばせたという精神的利益がえられれば十分満足」(I、六〇五)する人間であった。

〈アルベルチーナの暮し、育ち〉

アルベルチーナは一方では裕福なブルジョワ、良家のお嬢さん風に表現されるが、他方では彼女の貧しさが繰り返えし強調される。(家柄がよくて昔は裕福な暮らしをしていたが、いまは没落したと推定してもよいだろうが)。

一四四

主人公の〈私〉がアルベルチーナに二度目に出遭ったとき、彼女はイギリス人の家庭教師に伴われていたし(I、八二八)、彼女の鼻にかかる喋り方には、「外国家庭教師の教育……などの要素はいっていた」(I、八七七)という描述は、明らかに外国家庭教師をつけることができるような裕福な家庭の教育を想定させる。彼女の言葉遣いからも、「裕福な家庭の出であることをすぐとらせるような言いまわし、……いかにもその身分にふさわしいわけまえを、身につけていなかったわけではない」(II、三五五)ことが窺える。最初彼女は「工業界や実業界に属する非常に裕福な階級に属する」(I、八四四)少女たちの一員として物語に紹介されていたし、ユダヤ人に対して偏見を抱く「信心家ぶった家庭の若いブルジョワ娘」(I、九〇三)、「ブルジョワの偏見に満ち、その叔母にはなんでもあけすけにうちあける」(I、九三一)少女であった。のちに『ソドムとゴモラ』でも、オデットと比較した条りのなかで、「かなりしっかりしたブルジョワの家庭の娘」(II、八三四)と評されている。

ところが一方、「アルベルチーナの素性がいやしい」(I、九三六)と考えている人たちもいる。また前にも触れたが、アルベルチーナは「貧しくて孤児」(I、八九五)という事実があるうえ、「人がアルベルチーナの貧しさをあわれむ」(I、九二三)こともあり、彼女がどんなに人のもてなしを受けていても、それで「貧乏の補い」(I、九三七)ができるわけではないという具合に彼女の貧しさは繰り返えし強調される。さらに彼女の貧しさは「すこしも結婚資金を身につけていないし、……自分ひとりの力では旅行に出るすべも

ない娘」(Ⅰ、九三五―六)と具体的に表現されている。

結局のところ、アルベルチーナは裕福なのか、貧乏なのか。どちらの境遇が本当なのか。ブルーストはこうした矛盾を解決することなく、アルベルチーナの暮しぶりを曖昧なままにしておいたように思える。

〈アルベルチーナの出身地〉

アルベルチーナの出生に関してもブルーストはわれわれに何も語らない。彼女の喋り方に「地方人の遺伝」(Ⅰ、八七七)を感じさせ、彼女は「フランスの農家の娘、その典型がサン＝タンドレ＝デ＝シャン教会の石にきざまれているあの農家の娘の化身の一つ」(Ⅱ、三六七)という具合に描出され、地方生まれであることが暗示されている。また〈私〉がバルベックで出会った乙女たちの家族の出生地を述べる箇所(Ⅰ、九一〇)、〈私〉はアンドレにはペリゴール地方と南部地方、ロズモンドには北部地方の特徴を認めるが、その際、アルベルチーナに関しては何も語っていない。ところが『ゲルマント』のなかで、彼女がパリの〈私〉の家を訪問して去るとき、「サン＝タンドレ＝デ＝シャンの聖像彫刻師がその教会の玄関にきざむことができたであろうような、そんなピカルディ・娘が私のところから去った」(Ⅱ、三七〇)と私は述べて、いささか唐突な感じだが、彼女が北部のピカルディ出身であることを示唆している。

〈アルベルチーナが過した土地〉

アルベルチーナの出生地がピカルディ地方であることを示唆したのは全篇のなかでさきほどのただ一箇所であるが、パリ、バルベ

ック、トゥレーヌ以外に彼女がその生涯に過した土地についても、〈私〉がアルベルチーナが生活した場所を飽くことなく知っていた(Ⅲ、三八五)にもかかわらず、ブルーストは言葉少ない。

A・ウインストンの調査によれば、彼女が過したその他の土地の多くは最初の原稿にはない加筆である。Ⅱ、一一一四ページでアルベルチーナがヴァントウイユ嬢の女ともだちと生涯「最良の年」を過した土地として、トリエステを挙げているが、この箇所の土地名は加筆である。『ソドムとゴモラ』でアルベルチーナが太陽に向かって舞いあがる鷗を指して、「私はあの鳥が大好き、アムステルダムでよく見たわ」(Ⅱ、八一―「加筆」ということから、彼女のアムステルダム滞在が判明する。彼女は「女の友人たちといっしょに何度かオランダの田舎へサイクリングに行った話をして、よく夕方おそくになってアムステルダムに」(Ⅲ、三八五)帰ったというのである。ところでアムステルダムがトリエステのかわりに、モンジュヴァンと同じ次元のゴモラの呪われた土地(トリエステに適用された修飾語――Ⅱ、一一二―)とみなされる箇所(Ⅲ、三九三、四三一)がある。ブルーストがまだ整理していなかった証拠であろう。『ソドムとゴモラ』の「ひらけ胡麻」となった条りでは、「私はかつてオーストリアのことをよく考えた、というのは、アルベルチーナが出てきたのはその国だったから(彼女の叔父はその大使館参事官だった――カッコ内は加筆)」(Ⅱ、一一九)と〈私〉は述べている。彼女がオーストリアから出て来た『venir de』という表現は(ボンタン氏が建設省の役人だったり、郵政省の役人だったり)はたまた大使館員だったりした事実はいささか物語としての整合性

を欠くが)本来ならば彼女はオーストリア出身であることを意味しよう(後続の文には「その国の地理的特徴、そこに住んでいる人種、その史蹟、風景」などが彼女の举止動作に認められるという記述がある。また「私」がヴェネチアで出会ったオーストリアの少女は「私」にアルベルチーナと同じような印象を与えた——III、六四九)。この土地オーストリアはトリエステでヴァントウイユ嬢の女ともだちと生涯「最良の年」を過したという事実によく符合する。トリエステはオーストリアに近く、一九一八年まではオーストリア領であったからである。「私」のヴェネチア滞在中、アルベルチーナのことを思い出して、彼女が「ヴェネチアにいた頃はまだ彼女ら(アルベルチーナがきつとしたように「私」が呼びとめた庶民的な娘たち「筆者」)は頑固な子供だったろう」(III、六二八)と「私」が述べる文章から、ヴェネチアもアルベルチーナが過した土地である事実が浮かんでくる。また驚いたことに、アルベルチーナはあのモンジュヴァンにも滞在したことがあるのだ。「囚われの女」のなかで、彼女は「モンジュヴァンのヴァントウイユさんのところでは、近所にいいアイスクリーム屋がないんだけど、あたしたちよくお庭でフランス一周をしちゃあ毎日ちがったミネラル・ウォーターを飲んだものよ」(III、一三一)と話す。「よく」あるいは「毎日」というからにはかなりの期間、彼女はモンジュヴァンに滞在したにちがいない。

以上、物語のなかに散在するアルベルチーナの生活に関する知識を与え得るような要素を収録した。話者が「私はアルベルチーナについて何を知っていただろう」(I、八五八)と自問するように、

われわれも同じ問いをみずからに投げたいほどであるが、こうした少ないアルベルチーナ像から、その生涯を再構成し要約してみよう。アルベルチーナ・シモネは一八八三年にピカルディ地方に生まれたらしい。彼女は農民の娘を具現化することになる。両親の死後、その叔母のボンタン夫人に引きとられる。叔母の夫ボンタン氏が駐オーストリア大使館参事官としてオーストリアに赴任すると、その地に彼女も住むことになる(オーストリア出身とみなされるほどそこに長く滞在したか、場合によってはそこで生まれた可能性もある)。当時オーストリア領であったトリエステで、ヴァントウイユ嬢の女ともだちが母がわりになって数年間彼女を育てる。彼女の生涯最良の時代であった。彼女はアムステルダム(場合によってはトリエステ)に滞在し、親しい女ともだちとその郊外をサイクリングすることもあった。フランスに帰ってからは、ヴァントウイユ嬢の故郷コンブレー郊外のモンジュヴァンにたびたび滞在することもあったが、例年夏はバルベックに滞在し、そのあと田舎に暮して翌年の春にパリに戻る生活であった。彼女は一年の半分は他人の家に住んだ。一八九九年夏(前年彼女は腸チフスにかかり、それ以後頭がおかしくなったと評する女ともだちもいる)、「私」(パリのブルジョワの息子で病弱で異常に繊細な感受性の持ち主)がバルベックで彼女に出会ったとき、彼女はもうすぐ十四歳になるところであった(バルベックでは学校の生徒として振舞う)。バルベックでは彼女は、エブルヴィルの叔母の別荘と友人ロズモンドの別荘に半々に住んでいた。彼女はときにはイギリス人家庭教師に伴われた、裕福なブルジョワのお嬢さんであったり、ときには逆に、貧しい孤児そのもので、

持参金もなく、叔母からも「厄介者」扱いされ（彼女はその叔母に對して喜ばせたいという感情をもつて接していた）、人に哀れを催させるほど不幸な少女であつたりする。パリでは彼女は叔母の家に住み、仕事もなくこの上なく自由な境遇であつた（叔父のボンタン氏は建設省あるいは郵政省の高級官僚である）。その家というのは雑役女中一人しかいないという具合で、それほど裕福ではない。彼女はもうじき自分局の独立した入口ができるのを楽しみにしていた。その時期にあたる一九〇〇年の秋、彼女はパリの「私」の家を不意に訪ね、以後彼の恋人となる。翌年の夏も、彼女はバルベックに滞在する。グランド・ホテルに「私」をしばしば訪ね、一緒に行動する。「私」に同性愛の女という疑いをかけられ、急に二人一緒にパリへ戻る。以後一九〇二年のはじめまで、ヴェルデュラン夫人の甥のオクターヴと婚約しているものの、パリの「私」の家で「私」と同棲する。叔母はそんな彼女の行動を黙認するが、それは彼女が金持と結婚すれば自分も分け前にあずかれるという魂胆からであつた。同棲しているあいだは、「私」の彼女に対する疑惑は異常に募り、「囚われの女」のように扱われる。一九〇二年のはじめ、彼女は「私」の家を去り、トゥレーヌ地方のシャテルロー附近（場合によつてはニース）の叔母の家に身を寄せる。この出奔は当初「囚われの女」から脱出する目的と思われていたが、オクターヴと結婚させたいという叔母の意思に従つたものであることが明らかになる。彼女はその地で落馬して死ぬ。その年二十歳になるはずであつた。話者の「私」は「これから彼女とともに私の小説をつくることになるだろう」（I、九一五）という決意のもとに、アルベルチーヌ

との物語を「創作」するわけだが、「私」がもたらす多種多様で膨大な量のアルベルチーヌ像に比して、彼女の個人の生涯に関する情報は決定的に少ないものであることが理解されよう。ひとりの主要な登場人物の生涯を伝える意味での必要なポイントが欠如していたり、不明になっていたり、ときにはいくつかの不整合性も認められる。彼女が物語に遅れてきた人物だからというだけではなく、そもそもプーレストは彼女をリアリズムの視点から描き出したわけではないからである。リアリズム的な読解で捉え得るようなアルベルチーヌの物語上の実生活の姿は散在するのみで、曖昧で茫々たるものだ。アルベルチーヌという主要人物の場合、プーレストはリアリズムの手法で表出したわけではないことは明白である。「客観的」な小説と異り、彼女はつねに「私」との関係においてしかその存在理由はない。彼女はいわば即自存在ではなく、つねに「私」の対自存在でしかないのだ。じつにアルベルチーヌが「私の創作」とみなされる由縁である。だからアルベルチーヌへの愛の向こうに、「私」が「もうひとつの、昔の、いつそう大きな痕跡、すなわち私の愛そのもの」(III、六一)¹²「私の愛そのもの」の強調は著者自身による）を予感するのは、意味なきことではない。

以上のように表現されたアルベルチーヌは普通の女ではなかった。「私」の彼女への愛は、そして彼女がもたらす嫉妬は、むかしのジルベルトの場合とは質が異なっていた。「私」の苦悩はむかしより複雑化し特殊化していた。アルベルチーヌがゴモラ（女の同性愛）

の女であつたからだ。〈私〉の苦悩と嫉妬の根本にある認識は、「こんどの場合、ライヴアルが私と似たような人間(男性||筆者)ではなく、相手の武器はちがついて、私は同一の場でたたかうことはできず、アルベルチーヌにたいしておなじたのしみをあたえることもできなければ、彼女のたのしみを正確にすることもできない」(II, 一一二〇)というものであつた。ただここで肝腎なことは、アルベルチーヌが最初から物語上客観的にゴモラの女として措定されているわけではないということだ。〈私〉は終始彼女のゴモラに対する疑惑に付き纏われる。ひとたび疑われたアルベルチーヌは、ゴモラの疑惑というベクトルにすでに方向づけられた〈私〉の異常な感受性の餌食となる。彼女の举止動作、言葉遣い、そしてとりわけ眼差しが、ゴモラのシーニュとして〈私〉の疑惑の対象となる。しかし〈私〉はついに彼女の生前に直接、自分がゴモラの女であることを彼女に認めさせることはできなかった。死後ようやく、アルベルチーヌがゴモラの女であるという証言を彼女以外の人間(エメ、アンドレ)から得るのであつた。〈私〉が「アルベルチーヌの場合でも、何かを知るのにどれだけ時間がかかったことか! 人の口を軽くさせてしゃべらせるには死が必要だった」(III, 六五〇)、と慨嘆するのも無理からぬほどである。だが果たして、アルベルチーヌのゴモラは客観的に証明された真実であろうか。その実体はゆるぎないものであつたであろうか。〈私〉自身、エメやアンドレの証言のすぐあとに、彼らの証言の真正性に疑問を投げかけるほどだ(後述)。またアルベルチーヌのゴモラに関する最後の証言として、『見出された時』のジルベルトは彼女のゴモラを否定する。また研究者

のなかには、「私たちは彼女の属性とされているレズビアンズムに関して議論の余地のないほどの証拠を一度たりとも得ていない」と主張するものもある。また作品解釈の次元では、ルジュヌらはアルベルチーヌの女性性を疑問視して、彼女は男性であるという置換説を唱え、オプライエンはアルベルチーヌの女性表現に疑問を投じている。果たしてアルベルチーヌは女を愛するゴモラの女であつたのか。単にそれは〈私〉の疑惑にすぎなかったのか。われわれはここで、アルベルチーヌのゴモラ像、すなわち〈私〉の疑惑の裡にあるゴモラ像——というのも、彼女のゴモラは〈私〉が彼女に関与する形でしかその存在理由はないし、〈私〉以外の関心者をもたないから——がどのように表現されているのか、可能なかぎり(物語の〈私〉のように)余すところなく調べ、再構成してみよう。その際、アルベルチーヌ(または〈私〉)のゴモラ表現をシークエンスごとに捉えてみたい。この場合、シークエンスとは演劇・映画で意味するそれだけではなく、〈私〉の心象世界で展開される内容的に一貫性のある文節をも意味する。

アルベルチーヌのゴモラ像の表現形式を調べてみると、ある一定の形式に従っていることが了解される。それはまず〈私〉の疑惑という形のもとで表現される。その疑惑も根拠のないものとするものに分類できよう。また場面が実際のゴモラの行為を表現しているかどうかは評価の分かれるところであるが、そのいくつかは〈私〉が直接目撃するゴモラの《現場》という形で呈示されている。それゆえわれわれの分類はつぎのようになる。(1)根拠のない(もともと根拠のない、またのちに根拠がなかったことが判明する、両方の意味)

〈私〉の疑惑（アルベルチーヌ自身の言葉からの〈私〉の推則、類推。彼女の表情・眼差し・態度・行動からの〈私〉の推則、類推。第三者の言葉からの〈私〉の推則）（2）根拠のある（もともと根拠があるとみなされる、またはのちに根拠があることが判明する、両方の意味）〈私〉の疑惑（①アルベルチーヌ自身の告白または言葉によって証明された根拠のある疑惑。②アルベルチーヌの関係相手の告白・言葉によって証明された根拠のある疑惑。③第三者の証言・調査等によって証明された根拠のある疑惑）（3）〈私〉が直接目撃する《現場》

（なお各シークエンスのちに「加筆」とある場合は、A・ウィンストンの研究したデータに依拠したものである）。

（1）根拠のない〈私〉の疑惑

当初アルベルチーヌのゴモラに関しては確たる第三者の証言もなく、〈私〉は彼女を単に浮薄な女だと思ひ込んでいた。やがてそんな彼女の言動・行動は、〈私〉に原因の定かでない不信を抱かせることになる。プルーストは加筆をしながら、女性の同性愛の確定用語というべき「ゴモラ」、「サッフォー」の言葉を使って、決定的なゴモラの布石を打っておく。すなわち、アルベルチーヌが〈私〉の裡に惹き起こす不信の念は「特殊な性格、とりわけゴモラの性格」（II、七八七―加筆）を帯びてくる、と〈私〉は予言する。また彼女の裡に嘘を予感する〈私〉が彼を詰問する場面では、海に身を投げて死んだゴモラ族の先祖の名前が不意に〈私〉の口を通して出現する。「私にうそがあるといつてせめたてるんですもの。こんなにひどいあなたを見たことはなかったわ。海が私のお墓になるでし

よう。……私はおぼれ死ぬわ、海にとびこむわ」——『サッポーのようにな』——『またそんなことをいつてからかつて、あなたは私のいうことをうたがうだけではなく私のすることもうたがうのね』（II、八〇一―加筆、傍点筆者）。

アルベルチーヌのゴモラがひとつのシーニュとして〈私〉の感性の網にかかるのは、まず彼女の眼差しを通してである。「彼女の眼差しに何か頹廢的な、不健康なものを読みとらせること」（I、九四七）があり、他の女を眺める彼女の眼差しが〈私〉には欲情に充ちたものにうつるのである。「彼女の眼差しは通りがかりの女の上にやわらかくびったりと固定され、はりつき、目をそらすと相手の皮膚をもぎとってしまうにちがいないと思われた。だがこのとき彼女の眼差しは、苦しんでいるのかと思われるほど少なくとも何か深刻なものを彼女に与えて」（III、一五〇―加筆）いて、〈私〉はそこに「彼女自身が感じるらしい欲望の暗い表情」を見るのであった。異常に亢進した〈私〉の嫉妬心は、ちよつとした彼女の眼差しにもゴモラのシーニュを読み取る。「このあいだ私がアルベルチーヌといっしょにいたくせに、ブローニーヌの森でテールについていたサイクリングの少女たちをちらつとながめずにはいられたかったあの目つき」（III、三八六）もそうしたシーニュである。

〈私〉の疑惑はとどまるところを知らない。ふかい不信の念にそまつた〈私〉は、あたかもアルベルチーヌが目にする女性がみなゴモラの女性であるかのようにみなす。だから彼女が（アンドレ、ヴァントウイユ嬢とその女ともだち、レア、ブロックの妹と従妹を除く）友人の女性に接するときさえ、〈私〉は疑惑にさいなまれるのだ。

『失われた時を求めて』における「ゴモラのほう」(Ⅱ) (徳田陽彦)

一五〇

こうした女性たちに対する疑いは、最初彼女が友人たちと「私」の知らない場所で「私」と一緒にいるときより楽しんでいるという邪推(Ⅱ、七三〇)から始まる。この段階で興味深い加筆した文章が二つある。すなわち、待てども来ない彼女に対する「私」の疑惑——「どこかのカフェで、その女友だち連中といっしょに夜食をとっているかもしれない」(Ⅱ、七三〇〇加筆)と、またそのとき遅ればせながら電話する彼女の言葉——「だって私いま女のお友だちのところにいるのよ」(Ⅱ、七三四〇加筆、ともに傍点筆者)という文である。プーローストがアルベルチーナがすぐ来られない訳は女ともだちと一緒にいたいからだという暗示を巧みに与えているこれらの文章は、のちの根拠のあるより厳しい疑惑の下拵えの役割を果たしているのである。そしてアルベルチーナとアンドレがバルベックのカジノで踊っているポーズを医師コタールが指摘した場面(Ⅱ、七九五)以後、疑惑と追究は病的なほど執拗なものになってゆく。

アルベルチーナが女のともだちに「では、あした、八時半に。おくれではないわいよ」(Ⅱ、一〇一七〇加筆)というのを「耳にしたとたんに、私の安心はこわされてしまうのだった」(Ⅱ、一〇一八〇〇加筆)。その結果、若い女が新たにバツベックに着くのを知ると「私」の安心はまた崩れてしまい、「私」は「なるだけ遠くへ出かけるようにアルベルチーナに申しでて、彼女がその若い女と知りあいにならないように」(Ⅱ、八四〇〇〇加筆)と心を砕いたりする。軽便鉄道に乗っていても、彼女が他の婦人たちとだけで別のコンパートメントに居ると「私」は急いでそこにかけつける(Ⅱ、一〇四二〇〇加筆)。また「私」がジゼールに出遭ったとき、彼女は「

ちやうどアルベルチーナの仲のよい女友だちのことで」アルベルチーナに話があると言う。その「女友だち」のことを問い詰めるとジゼールは言葉を濁す。「私」はそこに彼女のやましさを感じないわけにはいかず、疑惑の念に苦しむのであった(Ⅲ、一七七—八〇〇加筆)。

プーロニーユのサイクリングの少女たちのような行きずりの少女や女たちもアルベルチーナのゴモラの対象になる、と「私」は疑う。「私」は彼女がゴルフのうまい若い女の名をわざと知らない振りをしていることに嘘を見出したり(Ⅲ、四〇七)、菓子屋のマグムに對し「まるでマグムの注意をひきたがっているように、ちらりちらりとその方をながめる」アルベルチーナの眼差しを、「それはまるで近寄ることのできない女神の方に、繰り返し哀願の目を上げるようだった」(Ⅲ、四〇八〇〇加筆)と解釈したりする。また誰にも分らない指環を見て、「私」はつらく思うのであった(Ⅲ、四六二〇〇加筆)。実際にアルベルチーナを前にしていないときも、「私」の疑惑に充ちた想像力は疲れを知らない。彼女を連れ戻すために私の依頼をうけてトゥレーヌの叔母の家に行ったサン・ルーの話のなかの「納屋」という言葉をきいただけで、「私」の想像力はすぐさま駆けめぐる。「納屋のなかに女の友だちと身を隠すことだってできる。あの客間、叔母が留守のときアルベルチーナがなにをしていたかわかったものじゃない」(Ⅲ、四七二)といつて、「私」はその言葉がもつ衝撃力を明らかにする。同じサン・ルーの話にちらつと出てくる、彼がその家を辞して出るときに出会った土地の若い娘や、近くに住む元女優もすぐさま「私」の疑惑にみちた想像力

をかきたてるのである(Ⅲ、四七四)。彼女が死んだ後でさえ、「私」の嫉妬は死んだアルベルチーヌのゴモラ像を甦らすのだ。それはまず「私」を騙して行つたと勝手に信じたバルベックのエコール農園の彼女のイメージとなつて現われる。彼女は「『ここまで探しに来る気遣いはいわ、邪魔されっこないわ』という言葉業を農園でその女友だちに言っている」(Ⅲ、四七九〥加筆)と「私」は想像するのだ。同じくバルベックで町方の娘を「拾うと、しばらくして夜になつてから彼女は砂浜で、あるいは断崖の下の見すてられた小屋で落ち合ったにちがいない」(Ⅲ、五二一〥加筆)と「私」は信じこむ。しまいには、バルベックで最初出会つた頃のアルベルチーヌ像まで溯り、彼女には「うしろ暗いところがある」と自分が直観してゐたことを思い出し、こうした直観は「アルベルチーヌの女教師がこの情熱的な娘を、見かけによらずあとでどうしても飼ひ馴らせない野性の獣を檻に追ひ込むように、小さな別荘に呼び戻すのを見た夕方に得た」(Ⅲ、六一〇〥加筆)と「私」は語る。しかしこの「夕方」の場面は『花咲く女』のなかには存在しない。おそらくブルーストは加筆することによって、アルベルチーヌのゴモラの性質が生来のものであることを強調したかったのであろう。

「私」がアルベルチーヌの相手として疑っている主たる女性は、アンドレ、ヴァントウイユ嬢とその女ともだち、レアである。アンドレはアルベルチーヌの死後、自分がゴモラの女で彼女と関係したことを告白しているし、ヴァントウイユ嬢とその女ともだちは『スワン』で「私」が直接目撃した「モンジューヴァンの場面」からゴモラの女であることが明瞭であり、またレアはバルベックですでに

ゴモラの女として描出されている。アンドレをのぞく三人の女たちは「サフィスムのプロフェッショナル」である。ところでこうした女たちとアルベルチーヌの関係を「私」が疑うシークエンスにも、根拠のないものがいくつかあることがのちに判明する。「私」の懇願に折れてバルベックから帰ることに合意したアルベルチーヌは、実は「私」のためではなく、アンドレから電報を受けとり、アンドレとその祖母のアパルトマンで会う約束をしたから帰つたのだ(Ⅲ、三八九)と「私」は勝手に信じこみ、そこで二人の姿を想像する。しかしのちに『逃げ去る女』のアンドレの告白によって、アルベルチーヌがバルベックを離れたのは単に彼女が腸チフスにかかつて頭がおかしくなり、その結果、簡単に理由もなく心変わりしやすくなつたためだ(Ⅲ、六一九〥加筆)ということがわかる。腸チフスが変心の理由というのは、唐突で、こじつけという感じがする。「理由もなく心変り」するという事実はひとりの人間の本性に関わるものであるのに、アンドレの告白までに描かれていたアルベルチーヌ像からはまったく想定できない事実だ。逆にこの本質的な新事実、小説力学上、それまでに描かれていたアルベルチーヌ像を支え切れずとは思えない。いささか粗雑な加筆であると言わねばなるまい。

『囚われの女』のなかで、アルベルチーヌはヴェルデュラン家の夜会に行きたがる。当初「私」はそれは彼女がそこでヴァントウイユ嬢とその女ともだちに会うためだと疑うが、のちのアンドレの告白によると、婚約者のヴェルデュラン夫人の甥にそこで会うのが目的だったことが明らかになる。「私」はアルベルチーヌをヴェルデュラン家のかわりにトロカデロにやる。しかしレアがそこに出演す

るのを知ると、アルベルチーヌがレアとその女ともだちに再会するのではないかと懸念し、フランソワーズを彼女を連れ戻すためにトロカデロにやる。結果的には、すべて杞憂であつた。アルベルチーヌはひとりでぼつんと立見席にいたのである。そのほかエメの証言(Ⅲ、八四)を介して、〈私〉はアルベルチーヌの相手がプロックの従妹エステルだと早合点し、エステルの写真を彼に送るが、彼はエステルではないという返事をよこした(Ⅲ、三六四Ⅵ加筆)エピソードなどもある。

この項のシークエンスにはかなりの加筆がみられる。加筆は単にアルベルチーヌのゴモラを深化するだけではなく、〈私〉が疑う彼女の主要相手がアンドレ、ヴァントウユ嬢とその女ともだち、レア以外にも数多く創り出されるにつれて、彼女のゴモラを空間的にもひろげるのだ。また「ゴモラ」や「サッフォー」の専門用語の加筆には、彼女を文字通り認知されたゴモラの種族のなかに完全に取り込み、その種族の中心人物に仕立てようとする意図もみられよう。同時に、演じているわけではない無意識の眼差しが本質を反映するものであるとみなすかぎり、アルベルチーヌのゴモラの欲情のこもった眼差しを追加することは、ゴモラが彼女の本質的な属性であることをより鮮明にする。そして死んだのちにも思い出される彼女のゴモラに対する〈私〉の疑惑というより〈私〉の執念は、この属性を倍加するのである。ところで、ゴモラ族のマニフェストとも形容できるような調子の一般論、「世界にちらばったゴモラが、はなればなれになった人員を集め、聖書にある市を再建しよう」(Ⅲ、八五二)云々は加筆である。種族としてゴモラを捉えようとする意図

は、やはり遅れて生まれた発想なのであろう。

(2) 根拠のある〈私〉の疑惑

「根拠のある」とは、疑惑が真実であると証明されたという意味ではなく(真実か否かは解釈の問題になろう)、疑惑を惹き起こすにたる程度の客観的な理由があるという意味である。

① アルベルチーヌ自身の告白または言葉によって証明された〈私〉の疑惑

ひとたび疑われたアルベルチーヌの言葉は、〈私〉にとって虚偽にみちたものとなる。不信に陥った〈私〉は彼女の言葉の虚偽をつらい思いで見抜くのだ。〈私〉が彼女の油絵に感心すると、彼女は一度もデッサンの稽古をしたことがないと答えるが、いつかバルベックでデッサンの稽古に行くと彼女が言ったことを〈私〉は思い出す。彼女はデッサンの稽古に行くと言ったことは嘘であると認める(Ⅲ、一八〇Ⅵ加筆)。またベルゴットが死んだ日に、彼女はそれを知らず、この作家に会ったため帰りが遅れたという嘘をつく(Ⅲ、一八八Ⅵ加筆)。アンフィルヴィルのある婦人の家で女ともだちと会う約束(Ⅱ、七九九Ⅵ加筆。〈私〉はそのために「ある嫌疑を抱いて苦しむ」も、『囚われの女』では嘘であることを彼女は無意識に告白する。

主要な登場人物との仲に関してもアルベルチーヌははじめは嘘をつく。たとえばジルベルト。『花咲く乙女』でジルベルトから直接彼女の名を最初にきいた〈私〉は、彼女にふと学友のジルベルトを知っているかと尋ねるが、彼女は否定する(Ⅱ、七三八Ⅵ加筆)の

ちに彼女は学友のジルベルトを知っていると洩らし、ジルベルトがゴモラの女であることを強く否定する(Ⅲ、二三〥加筆)。さらにのちに彼女は、ジルベルトに接吻されたことを明らかにするのだ(Ⅲ、三七六〥加筆)。昔『スワン』のなかで、ジルベルトがシャンゼリゼと一緒に歩いていた男は、実は男装したレアであることが『見出された時』の加筆のなかで判明することをも鑑みると、ジルベルトに關するこうした加筆は、ジルベルトをゴモラの一員に巻き込もうとするブルーストの意図にそったものであると考えられよう。

ゴモラの女に關するアルベルチーナの嘘も典型的な彼女の嘘の常道を踏むことになる。たとえばレアの場合、彼女は最初レアを「知らない」、つぎに「知っている」、第三の段階ではゴモラの女ではないと否定、そして自分は何もしない、最後に自分は彼女の誘いを断わった、という具合にしだいに前言を翻しながら、自分の嘘偽を無意識に暴露してゆく(Ⅲ、一四四—五〥加筆)。のちにはついに、レアと一緒に三週間旅行したことを告白する(Ⅲ、三五〇〥加筆)。ブロックの従妹エステルは女優レアとの同棲が知れわたっているし(Ⅱ、八〇二)、ブロックの妹は元女優とグラッド・ホテルの人間で「ベットにはいつているのにもひとしい無遠慮なことをしてスキヤンダルをおこした」(Ⅲ、八四二〥加筆)。〈私〉はこの二人にアルベルチーナが近づくのではないかと懸念し、彼女を連れて急いでパリに帰るのである。ところがアルベルチーナはエステルについて最初「会ってもわからないくらい」といつて交際を否定する(Ⅲ、一一一〥加筆)が、のちにエステルに自分の写真をあげたくらい親密であることを告白する(Ⅲ、三四二〥加筆)。

〈私〉の疑惑が決定的に不動のものとなるのはやはり、「ひらけ胡麻」、すなわち『ソドムとゴモラ』の終わり近くのアルベルチーナのヴァントウイユ嬢とその女ともだちをよく知っているという告白であろう(Ⅱ、一一一—四)。「女友だち」は彼女の母がわりに彼女を育ててくれた。ただしアルベルチーナとヴァントウイユ嬢およびその女ともだちとのゴモラの関係は、のちにアンドレによって否定される。アルベルチーナが二人と知り合ったとき、自分でもまだその性癖を知らなかったし、互いの性癖を知るにおよんでも、彼女たちは知りすぎていて實際の關係はなかったのだ(Ⅲ、六一七)。

疑惑の証拠を〈私〉が決定的に握ったと思うのは、アルベルチーナがふと洩らし最後まで続かなかった言葉「*me faire casser*……」(Ⅲ、三三七〥加筆)である。〈私〉はこの言葉を「*le pot*」を補って完成し、「最低の娼婦だつて使わない」この言いまわしに動揺する。ギローの *Dictionnaire érotique* によれば *casser le pot* とは「*sodomiser*」すなわち「*pratiquer le coït anal*」を意味することである。この「*me faire casser le pot*」はその受身の意味である。この言いまわしは〈私〉がアルベルチーナから得たゴモラの唯一の証拠であるが、間接証拠であることに変わりはないし、「*le pot*」を補ったのは〈私〉の解釈である。ギローの辞典には、*casser* につづく単語として他の語も挙げており、アルベルチーナが絶対に「*le pot*」と続けるはずであったとは完全には言い切れない。ある意味ではブルーストの事柄を曖昧にする一種の「ばかし」手法と考えられなくはない。

のちに前言が嘘であることをアルベルチーナが告白あるいは無意

識に洩らし、〈私〉の疑惑に根拠があることが判明するこの図式は、多くは加筆である。加筆は彼女のゴモラという属性を深化させるとともに、ヴァントウイユ嬢とその女ともだちのみならず、レアやエステルとも親密な関係であった事実を付け加え、彼女とジルベルトとの関係さらにはジルベルトとレアの関係まで創り出し、ジルベルトを「ゴモラの種族」に巻き込む効果を生み出すのである。また加筆はアルベルチーナの存在をゴモラの種族の中核に据える効果ももたらし、ゴモラの人口をふやす結果を生じさせた。

②アルベルチーナの関係相手の告白・言葉によって証明された根拠

ヴァントウイユ嬢とその女ともだち、そしてレアやエステルは語らない。『スワン』の「モンジュ・ヴァン」を除いて、物語のなかで彼女たちが言葉を発する箇所はない。エメの調査によりアルベルチーナが関係を結んだという少女たちは、〈私〉に直接告白したわけではない。だからここでの関係相手とはアンドレとジルベルトだけである。しかしジルベルトが「見出された時」のなかでアルベルチーナのゴモラを否定する(Ⅲ、七〇七―八〇〇加筆)以上、彼女の関係相手と目され、関係を告白するのはアンドレだけである。

アンドレは「乙女たち」のひとりで、アルベルチーナの親友である。二人のダンスについてのコタールの指摘のあと、〈私〉の疑惑は具体的なものになる。バルベックでとりわけ〈私〉を不安にしていたのはアンドレの存在だった(Ⅲ、八四一)。しかし奇妙なことに、パリでは〈私〉はアルベルチーナをひとりで外出させるのが不安で

あったので、アンドレに彼女と同行するように依頼するのである。そうかと思うと、眠っているアルベルチーナが〈私〉にやさしく「アンドレ」と呼びかけたりして(Ⅲ、一一四加筆)〈私〉が動揺するエピソードもある。そんな頃に、最初はとるに足らないことに思われた例の「ばいかうつぎ」事件が起きるのだ(Ⅲ、五四―五〇加筆)。この場面には、アルベルチーナは「あやうくアンドレといっしょにいるのを見つかる場所だったので、多少手間どりながら乱れたベッドを見られないように電気を全部消し……」という異文がある。〈私〉がアルベルチーナにアンドレとの関係を問いつめると、「彼女の顔は怒りでさつと赤く」なり、強く否定する(Ⅲ、三九七)。

一方アンドレはアルベルチーナの死後、最初自分のゴモラの性癖は白状したが、アルベルチーナのそれは全面的に否定した。しかし二度目の告白で、アルベルチーナとの関係を洩らし、「あのひと、とても優しく、すごく情熱的だったわ」と言う(Ⅲ、五九九)。そのすぐあとに恐しい告白がつづく。アルベルチーナとモレルが組んだ話、すなわち、モレルが小娘をだまし、楽しんだあとでアルベルチーナにわたす挿話である(Ⅲ、五九九―六〇〇加筆)。アンドレは同時に、「ばいかうつぎ」の晩の真相、すなわち二人は〈私〉が帰る直前まで〈私〉の家で関係していた事実を白状する(Ⅲ、六〇〇―一一〇加筆)。アルベルチーナとアンドレの関係についての重要な加筆は、『逃げ去る女』の「アンドレの告白がもたらした衝撃的な新事実(アルベルチーナとモレルの共謀)」と「ばいかうつぎ」の真相をもたらす。どちらの挿話も、アルベルチーナを単なるゴモラの女で

はなく、狂気に近い淫乱なゴモラの女に仕立てることを目的としているように思われる（アンドレはアルベルチーナが抑えられないおのれの情欲を罪深い狂気のように感じていたと告白する）。

たしかにアンドレは自分とアルベルチーナの関係を認める告白をした。しかしアルベルチーナは、〈私〉が名指しでアンドレとの関係をただすと「顔がさつと赤く」なるほど怒る（Ⅲ、三九七）のである。この彼女の激しい否定以後、彼女はお返しに接吻をかたく拒否し、頬だけのしきたりの接吻しか許さなくなり、そして出奔して、とうとう彼らの同棲は終りをつける。これは何を意味するのであろうか。アルベルチーナにとってこの場面がもつ意味は、後日の「この間の晩、……二人の間にどこか前と変わったことができた」（Ⅲ、四〇四）という彼女の手紙の内容からも窺えよう。ここは小説のリアリティとして、アルベルチーナの心の変化の堅固さを読み取らねばなるまい。それに比して、のちにアンドレが説明する、アルベルチーナはヴェルデュラン夫人の甥と結婚する（「甥と結婚する」事実は加筆）ために呼び戻されたという出奔の理由の真相は、それまでの物語の流れを考慮すると、なんと唐突で軽々しいものであろうか。小説力学の視点に立脚すれば、アルベルチーナの出奔を介して相反する二つの挿話の重さは均衡を逸していると言わねばなるまい。そしてアンドレの告白（唯一〈私〉が知っている女の告白）自体も、アルベルチーナの連れがアンドレであれば安心だというへ私〉の認識を加筆で加えたこと（Ⅲ、一九、一三六）との均衡を欠いているし、つぎつぎに新しい事実を軽々と暴露するに及んで、唐突で奇異な感じを与えざるを得ない（たとえば、アルベルチーナ

とモレルの関係の加筆など）。このアンドレのちにいととも簡単におのれのゴモラ性を捨ててオクターヴと結婚するということは、彼女のゴモラはもともと本質的なものではなく一過性のものであり、彼女が夫の意思に忠実な女に変身すること（Ⅲ、七三一）を加味すると、彼女とアルベルチーナとの関係は戯れにすぎないように思われる。

③ 第三者の証言・調査等によって証明された根拠

第三者とはアルベルチーナと彼女の関係相手以外の人を指す。この第三者が証人となって彼女のゴモラを証言したり、あるいはエメのようにそれを調査して報告する形式である。実際にアルベルチーナに会う機会がなかったピュトピュス夫人の小間使いは、バルベックにやって来てアルベルチーナと接触するのを〈私〉がひどく恐れていた女であるが（Ⅲ、八四一―加筆）、「ソドムとゴモラ」の「それは女のほうも愛する女なのだが」（Ⅱ、六九六―加筆）というサン・ルーの証言があるのでこの範疇に入れるべきであらう。

第三者を話者が特定していない場合もある。「ある人からふともれた言葉によると、その人はアルベルチーナとアンドレが、二人きりで海水浴に行くところを見たのであった、そのような些細な事柄は、……特殊な素因のある人には、からだに害をおよぼし、新しい苦しみの種になるのである」（Ⅱ、八〇四）。「特殊な素因のある人」である〈私〉にとって、このような証言でさえ「新しい苦しみの種」になったのである。また同じように不特定な、というよりむしろ曖昧な証拠にもとづいた疑惑の根拠もある。バルベックのカジノで「

『失われた時を求めて』における「ゴモラのほう」(Ⅱ) (徳田陽彦)

すらりとして色の青白い一人の若い美女」が、アルベルチーヌの上に「交互に光って回転する眼差しの灯火をひっきりなしにあてつづける」のを見て、〈私〉は「翌日の恋の待ちあわせの暗黙の合図」ではないかと解釈し、数日後、この女がアルベルチーヌを以前から知っていたらしい証拠を握ったと語る(Ⅱ、八五―一二〇加筆)。しかしこの証拠は曖昧で、この若い女が後述の叔母の品行のわるい女ともだちのことなのかどうか、〈私〉は明確にはしていない。つぎのシークエンスも曖昧である。コタール夫人がいつかアルベルチーヌに「変な好み」があると言ったのを思い出して、〈私〉は改めて夫人にその意味を尋ねるが、曖昧な返事しか返ってこなかった(Ⅲ、一〇九七―加筆)。

第三者の証言によってアルベルチーヌの嘘がばれて、〈私〉の疑惑に根拠を与える代表的な例は、彼女が行ったことがないというピユット・ショーマン公園(Ⅲ、一九〇加筆。奇妙なことに、なぜピユット・ショーマンはいけなくてサン・クルーはよいのか〈私〉は明らかにしていない)にまつわるボンタン夫人の証言であらう。アルベルチーヌが「三年ばかりまえには、毎日のようにピユット・ショーマンの公園に行くと言ったききませんでしたわ」(Ⅲ、三八九加筆)というボンタン夫人の証言によって、彼女の嘘がばれるのである。のちにアンドレは、二人はピユット・ショーマンの知り合いの家で関係を結んだことを告白する(Ⅲ、六〇八)。また第三者の証言としては運転手の例もある。しかし彼はアルベルチーヌと結託していて、その証言には信用がおけない(Ⅲ、一三二―一六六加筆)。ヴェルサイユでの七時間以上ものアルベルチーヌの不在に関する運

転手の証言は、完全に〈私〉の疑惑を永解させたわけではない。彼らが三日間バルベックを旅行したときに出した絵葉書が一週間もかかって着いたという事実も、〈私〉にはひっかかるものがある。実際あとになって判明することだが、アルベルチーヌはバルベックには行かずに三日間オートウイユの女ともだちの家で、ふざけ半分に「たった一度だけ外出したときは男に変装した」ことをのぞいて、「うんざりしながら過ごした」(Ⅲ、三三四加筆、男装はゴモラの好みを間接的に証明するとも言えよう)のであった。それを知って私は彼女の嘘に打ちひしがれる。

第三者の証言のなかでアルベルチーヌのゴモラを最初に「客観的に」開示するのは、アルベルチーヌとアンドレが乳房を完全にくっつけながらワルツを踊る場面のコタールの指摘である(Ⅲ、七九五―一六)。〈私〉も二人の踊りを見ていたが、コタールが「たしかに快樂の頂に達していますな」と言うまでこの踊りの意味に気がつかなかった。そしてひとたびコタールの指摘した意味を悟った〈私〉には、ダンスをやめた女たち二人の笑いさえ残酷なものに感じられるのだ。ただここで重要なのは、コタールの指摘もひとつの解釈だということである。またコタールは「鼻めがねを忘れてきたので、よく見えないのだが」と言いながら、彼女たちの状態についてある程度の確信をもって断定していることも、事実を曖昧にしているひとつの要素であらう。この場面は、完全無欠なほど客観的なゴモラの「現場」というより、ゴモラの解釈を生じさせる可能性をもつ「現場」であるともみなしたほうがよい。というのもこの場面のすぐあとに「アルベルチーヌとアンドレとに関する彼の言葉が私に負わせた

傷は深かった、しかしもっともひどい痛みは即座には私に感じられなかった」(Ⅱ、七九七頁加筆、傍点筆者)という文節があるところから、〈私〉にとつて啓示的であつたのは、この場面そのものではなく、コタールの指摘＝解釈なのだということが理解されるからだ。

第三者の調査としてはエメの調査しか存在しない。サン・ルーのトゥレーヌ報告は、それをきいた〈私〉の想像力が働きすぎたため勝手な疑惑を生むことになつたが、本来ゴモラの調査を目的としたものではない。エメの調査こそ唯一の本格的なもので、彼はいわば推理小説の探偵の役割を果たすのである。〈私〉から委託されたエメの調査は(エステルの写真をのぞいて)二度にわたっている。それぞれの調査は手紙という形式で報告される。すなわち、バルベックのグランド・ホテルのシャワー係の女の証言を得るための調査の報告(Ⅲ、五一五―六)と、叔母の別荘のあるニース(トゥレーヌ)に行つて、死んだアルベルチーヌの生前の素行を調査した報告である。前者ではシャワー係の女の証言から、「灰色の服を着た背の高い女性」、「手眼鏡をもつた非常に肌の黒い女性」、「自分より若い娘たちで、なかでも濃い赤毛の娘」とアルベルチーヌはシャワー室で関係をもつたことが示唆される。示唆されると書いたのは、シャワー係の女は「非常に慎しみ深いひとで、ことさら詮索することはない」であつたので、この女は〈現場〉を目撃したわけではないからである。ある意味ではこれも間接証言と言えなくはない。後者の「ニース」の相手は洗濯屋の娘である。エメはこの娘から(「酒を飲ませて」)直接きいた話を〈私〉に報告する。直接の当事者の発言である以上(「飲ませて口を割らせる」など男相手にすることのよ

うな気がしないでもないが)、信憑性があると言わねばなるまい。

アルベルチーヌのゴモラに関して決定的で具体的な描述をもたらしたエメの調査はきわめて説得力があるように思われる。しかしエメの調査で明らかになつた具体的な彼女の相手は、バルベックやトゥレーヌ地方の多くは彼女より若い少女である。また彼女がモレルと契約を結んで弄んだのも少女たちである。ところで Socrades は、「男性の同性愛者がしばしば興味の対象を年若い少年に向けるのに反して、女性の同性愛者は前思^{アレクセル}春期の若い娘に対し実際に誘惑するほど惹かれることはめつたにない。女性の同性愛の愛童症というものはほとんど、あるいは存在しないといつてよい」と主張している。アルベルチーヌの「餌食」となつた少女たち fillettes の年齢は定まっておらず(Grand Larousse では fillette とは一〇―一四歳の女子とされている)、彼女たちが前思春期の少女なのか思春期の少女なのか即答できないが、思春期とは同じく Grand Larousse によると、女性は一五歳以上大人までの少女期をいうとされていることを考慮すれば、物語の少女たち fillettes はやはり前思春期に属するとみなすのが妥当であろう。それゆえ Socrades の説が妥当だとすれば、アルベルチーヌはきわめて異常な女性だということになろう。あるいは多くの研究者たちが主張する彼女の置換説、すなわちアルベルチーヌは男として(相手も男として)解釈すべきであるという考えにもまったく理がないわけではないように思われる。アルベルチーヌが男だとすれば、同性愛の表現形式の代表的なひとつである少年愛に耽けることも当然あり得よう。物語の〈私〉はある日、ゴモラの快楽を観察するために、洗濯屋の小娘た

『失われた時を求めて』における「ゴモラのほう」(Ⅱ) (徳田陽彦)

一五八

ちを曖昧宿に來させて二人に同性愛の場面を演じさせる(Ⅲ、五五〇—)。「自分が感じていない感覚の変った生々しい物音の意味」というものは正確には掴めない……あの快楽はそれを味わう人間であれほどのたうたせ、ああした未知の言葉を吐かせるからにはひどく激しいものにちがいない」と推測するが、そうした快楽の「甘美な劇」は「永久に彼女以外のものに対して下ろされた幕のために私の目から隠されていた」と述べている。置換説にたてば、ブルーストもみずからの男性の同性愛経験から女性の同性愛が類推できると考えたということになるのであろうが、果たして女性どうしの「甘美な劇」はその方法で表現できたのであろうか。

(3) 〈私〉が直接目撃する〈現場〉

ゴモラの女たちの現場を〈私〉が直接目撃する代表的な例はなんといっても『スワン』の「モンジュ・ヴァン」である。この場面はゴモラの出発点であり、『失われた時を求めて』におけるゴモラの〈現場〉表現の最高の出来ばえのものであろう(ただしヴァントウ・イユ嬢が鎧戸と窓をしめたためシャルリュスの場合のようなりアルな描写がつづくわけではない)。これに反して、アルベルチーヌが〈私〉の前で演じる〈現場〉は果たしてゴモラの証拠といえるほどのものであるかどうか定かではない。ブルーストは意図的にその表現を曖昧にしているのである。コタールが指摘したアルベルチーヌとアンドレのダンスの場面は、「ぴったりとからだをくっつけてゆつくりとワルツを踊っていた」という部分が描写で、そのあとはコタールの解釈とそれに影響をうけた〈私〉の疑惑である。だからこ

の描写部分は、コタールの解釈以外の他の解釈を必ずしも排除するわけではないのだ。二人は「品行のわるい娘たちのまねをして、寄宿生のようにあそびぶづけ」(Ⅱ、八〇三〥加筆)ているにすぎない、要するに戯れにすぎないという可能性もあるわけだ。もう一つの〈現場〉、アンドレが「アルベルチーヌの肩に甘えるようにその頭をもたせかけ、目をなかばとぎしながらアルベルチーヌの首筋に接吻するのが私に見えたのだ、あるいはまた二人が目くばせを交した」(Ⅲ、八〇四〥加筆)現場も同じように解釈できなくはない。前述のアルベルチーヌが「一度、ジルベルトに車で送られて接吻されたこと」(Ⅲ、三七六〥加筆)も少女たちの戯れであらう。あるいはもうすこし進んで、といっても「ゴモラ」と名づけるほどの段階ではない程度、すなわち「アルベルチーヌは、深入りはしていないまでも、おそらく完全に潔白であるとはいえないようなあそびごとを何度かアンドレにそののかした」(Ⅱ、八〇四〥加筆)ことがあるにすぎない程度のことかもしれない。おもしろいことに話者の〈私〉もわれわれと同様な考えをもっているのだ。ブロックの妹と元女優がスキヤンダルをおこなすが、「それはまずゲーム室のバカラのテーブルをかこんで愛撫することからはじまったのだが、それだけならば要するにうちとけた友だちどうしのしぐさ、une intimité amicaleでかたづけることができた」(Ⅱ、八四二〥加筆)。人前での愛撫が「うちとけた友だちどうしのしぐさ」ならば、アルベルチーヌとアンドレのダンス、首筋の接吻は、それ以下の程度の行為ではないだろうか。彼女たちがゴモラをおのれの性の本質とする女であるとは、これらの〈現場〉の描写からは帰納できないと考えたほうが

妥当であろう。アルベルチーナとアンドレのバルベックにおける関係についてのわれわれの視点は、前章で論じたつぎの視点に集約される、すなわち、「少女どうしのこの種の恋愛は意識化された同性愛というより、思春期にある少女たちの無邪気な戯れに近いものではないだろうか。かりに同性愛の萌芽であると認めたとしても、……アルベルチーナとアンドレの関係は、均質なグループ内という個の段階にとどまっていて、異質な女どうしが関係し合い、不均質な成員どうしが構成する種族としての『ゴモラ』を形成するには至らない同性愛ではなからうか」。

以上論じてきたことから了解されるのは、〈私〉のアルベルチーナのゴモラに対する疑惑には根拠がないときもあるし、根拠があるときもある、ただ、〈私〉にとつて疑惑が絶対に真実であると断言することを可能にするシークエンスはひとつもないということである。換言すれば、アルベルチーナがゴモラの女であることを決定的に証明する客観的な事実が存在しないということである。物語を分析した結果それが判明したというより、ブルーストが巧妙にアルベルチーナのゴモラの真実をばかし、曖昧なままに放置したからである。こうした曖昧性はことアルベルチーナのゴモラ表現に関するだけではない。ブルーストは『失われた時を求めて』に登場する女性たちの名前に関しても、もともと曖昧性を付与しているのだ。前章でも触れたように、初期の『カイエ』の段階で登場する女性には、マリア、ソランジュ、セプティミ、アンナというすぐれて女性的な名前がつけられていた。アルベルチーナ、アンドレ、ジルベルトはそれぞれ

の男性名、アルベール、アンドレ、ジルベールを持っている。このことに関してミラーはつぎのように述べている。「彼の恋愛相手の名として両性的な名前を選ぶ際、あれほど入念に創り出していた作品において、これらの曖昧な（両義的な）名前のもつ重要性を彼が少なくとも直観的に感じ取っていたとは、大いにあり得ることである。彼の初期ノートでは、たとえばバルベックのおもな少女たちはもつと女性的な名前をもっていた」⁽²²⁾。ジルベルトは三年の『スワン』にすでに登場するが、バルベックの少女たちの名前はアルベルチーナ創造とともに生み出されたのだし、『花咲く乙女』刊行以前にはマリア等の名前以外に存在しないことを考慮すると、ブルーストは少女たちに名前をつける際、やはりなんらかの意図、物語の内容に両義性をもたらしことを予想した意図をすずにもっていたのではないだろうか。

ブルーストは小説の中間部の主要な骨格として、アルベルチーナのゴモラの真相を解明する推理小説じみた物語を、疑惑と否定のサイクルを配置しながら創り出し、ある意味では劇的緊張感を惹き起こす。しかし推理小説とは異なり、この緊張感は最後に大団円をむかえるわけではない。決定を最後の最後までひきのばした挙句に、真相は結局「藪の中」という具合に物語を仕立てたのである。

最初の決定的証拠というような印象を与える形で〈私〉が演出したアルベルチーナとアンドレのダンスは、とどのつまりコタールの指摘「解釈であった。またアルベルチーナはヴァントウイユ嬢の女ともだちに養われたのは嘘であり、彼女には二度しか会っていないと告白するし（Ⅲ、三八二—三〇三）加筆」、アンドレはアルベルチーナ

『失われた時を求めて』における「ゴモラのほう」(Ⅱ) (徳田陽彦)

とその女ともだちとのゴモラの関係を否定する(Ⅲ、六一七)。プルーストは決定的というべき当時者や第三者のアルベルチヌのゴモラに関する証言のあとに、必ず反論という形で彼らの証言の虚偽性を暗示することにより、真相を曖昧にするのだ。アンドレの告白のあと、〈私〉はアンドレが〈私〉を苦しめたことからそんな証言をしたのだと疑い、彼女の意図に不信を抱く(Ⅲ、六〇三)。さらにアンドレ自身の性格を分析しながら、彼女は自尊心がつよく、〈私〉の自尊心の鼻を折る必要からこんな告白をしたのだと語って、間接的にアンドレの嘘を暗示する。客観的と思われるエメの調査でも、シャワー係の女は「嘘をつくのが病みつきの女ね」(Ⅲ、五二〇)という祖母の言葉を〈私〉は思い出すのである。エメの第二の調査(トウレーヌ行き)の条りのあとにも、〈私〉は夢のなかでアルベルチヌに真相を尋ねるが、彼女は「エメの言うことなんかあてにならない。あなたが与えた大金に値するだけのことはしたように見せたいから手ぶらで帰ってきたくなかったのです。そして言わせたいと思っていたことを洗濯屋の娘に言わせたのです」(Ⅲ、五三〇)と答えて否定する。このようにプルーストは決定的証言のあとに反論を巧妙に按配して、真相をどこまでも曖昧なままに放置するのだ。アルベルチヌのゴモラは、終始、演出―反論―曖昧性という図式のもとで表現される。アルベルチヌのゴモラの最後の証言となった『見出された時』のジルベルトの場合も、逆の意味で曖昧性を保持するのだ。ジルベルトはアルベルチヌのゴモラを否定するが、話者は彼女がそのときに読んでいるのはバルザックの同性愛の小説『金色の眼の娘』だということを巧みに示し、状況証拠ともいっ

き雰囲気醸し出しながら、彼女の嘘を印象づけている。事の真相は二つの可能性のあいだで、妖しいまでのあやうい均衡をとっている。それは決定されず、曖昧なままだ。

考えてみれば、アルベルチヌのゴモラの真相は、〈私〉がたびたび述べているように、「暴露する資料を提出できるわけでもなかった」(Ⅲ、三九六―加筆)し、「もつと具体的な資料が必要」(Ⅲ、九〇―加筆)なのであり、「私が行なった」のは「不完全な調査」(Ⅲ、一五〇―加筆)にすぎず、窮極的には「私は証拠を持っていなかった」(Ⅲ、五四九)のである。だからわれわれも〈私〉といっしょにもう一度こう問わねばなるまい、「本当のところ彼女は何者だったのか」と。

本章ではプルーストのアルベルチヌ表現をまずその境遇の面からとりあげた。物語のなかの登場人物として彼女がなう役割の重要性に比し、物語に表出された彼女の境遇に関する記述が寡少であることを明確にして、その表現自体もときには矛盾をはらみ整合性を欠いたものであることを指摘した。ついでアルベルチヌの物語の本質であるゴモラ表現に関しては、プルーストの創作手法を考察し、プルーストが巧妙にかつ意図的な手法でゴモラの真相を曖昧なままの状態に描いたことをつきとめた。いま残された課題として、ではなぜプルーストは遅れて創造したアルベルチヌをゴモラの女にしたのかという問題がある。さらにアルベルチヌがいかにして曖昧で複合的な人物に表現されたのかという問題がある。今度はそうしたアルベルチヌ像の作品における意味を考察してみたい。そ

れは次章「アルベルチヌ解釈」の課題である。

注

「第一章」

- (1) Madame Scheikévitch 宛献辞『*Choix de lettres*, Plon, p. 208.
- (2) 『失われた時を求めて』の引用はすべてブレイヤード版『édition de la Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard』による。巻数とページ数を記す。翻訳はブレイヤード版に基づいた既訳「すなわち、井上究一郎氏、鈴木道彦氏、保刈瑞穂氏の翻訳に大部分依拠した」。
- (3) Louis Bolle, *Marcel Proust ou le complexe d'Argus*, Grasset, p. 163.
- (4) Milton L. Miller, *Psychanalyse de Proust*, Fayard, p. 65.
- (5) L. Bolle, *op. cit.*, pp. 169—70.
- (6) Jean-Yves Tadié, *Proust et le roman*, Gallimard, p. 168.
- (7) Jean Rousset, *Forme et signification*, José Corti, p. 165.
- (8) 拙稿『失われた時を求めて』における「コモラのほへ」——(1)『金沢大学教養部論集・人文科学篇一九』一四〇頁。
- (9) Gérard Genette, *Figures* III, Seuil, p. 126.
- (10) Allison Winston, *Proust's Additions, The making of "A la Recherche du temps perdu"*, II, *Table of additions*, Cambridge University Press.
- (11) 巻末の編集者S註(II, p. 1204.) 参照。
- (12) c. f., Ghislane Florival, *Le désir chez Proust*, Pathei Mathos, p. 237.
- (13) J. E. Rivers, *Proust and the art of love*, Columbia University Press, p. 249.
- (14) Philippe Lejeune, *Ecriture et Sexualité in Europe* No. 502—53, pp. 130—1.
- (15) Justin O'Brien, *Albertine the Ambiguous in Contemporary French literature*, Rutgers University Press.
- (16) A. Winston, *op. cit.*
- (17) Pierre Guiraud, *Dictionnaire érotique*, Payot, p. 516.
- (18) *Ibid.*, pp. 206—7.
- (19) Charles Socarides, *L'Homosexualité*, Payot, p. 161.
- (20) 拙稿(註8と同2)『一四四頁。
- (21) 拙稿(註8と同2)『一四三—四頁。
- (22) Milton Miller, *op. cit.*, p. 44. c. f., J. O'Brien, *op. cit.*, p. 91.